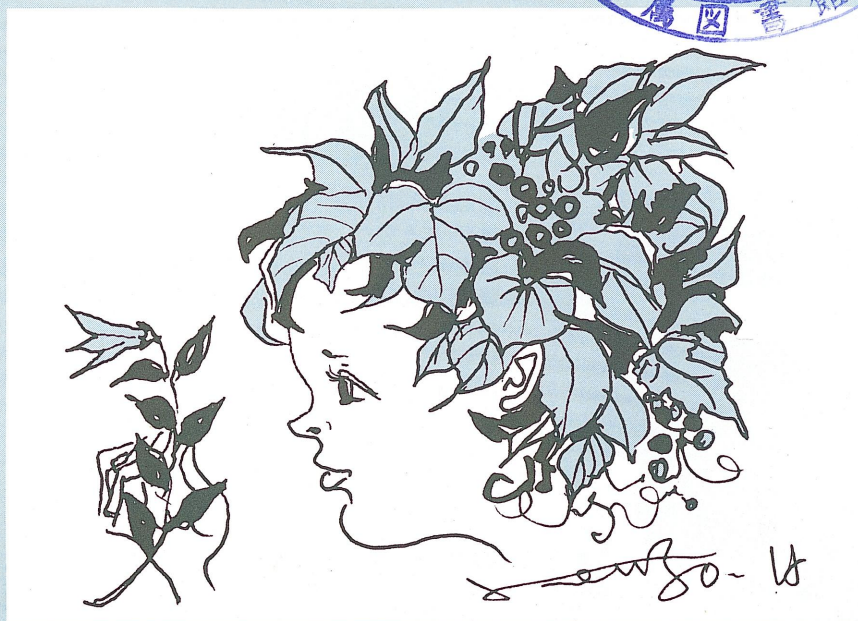


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1990—

4



幼稚園教育指導書・増補版



幼稚園教育を理解するために、また具体的な活動をよく理解するための手掛かりとしての必読書。

幼稚園教育要領について解説し、幼稚園が適切な教育課程を編成、実施する上での最上の参考資料であり、実際の具体的な保育のあり方、姿がわかる教育指導書。

文部省・著

A5判・192頁・定価320円(本体311円)

幼稚園教育要領解説



教育要領改訂の理由？「総合的」とは？「領域」とは？ などなど、教育要領の各項目について、明快な説明と、考え方の基本がのべられています。また、著者以外の協力委員による補足の話し合いもつけられて、よりわかりやすい内容となっています。目次から

- 第1章 幼稚園教育要領はなぜ変わるのか
 - 第2章 どんなふうになるのかー考え方の基本ー
 - 第3章 幼稚園教育の内容
 - 第4章 これからの幼稚園教育を計画し実践するために
- 付録 「幼稚園教育要領」全文

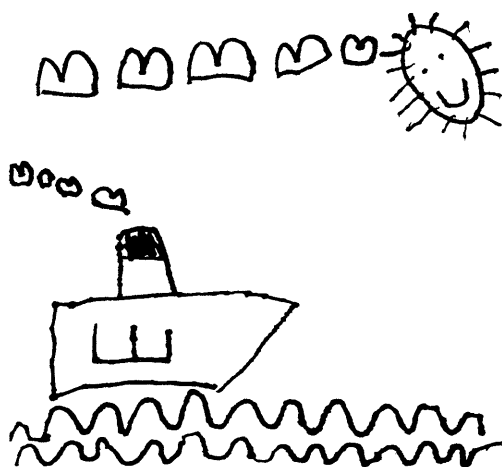
岩崎婉子・大塚牧夫・黒川建一・小林美実・近藤充夫・高杉自子・森上史朗・編著

A5判・270頁・定価1,200円(本体1,160円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼見の教育



第89卷 第4号

幼 児 の 教 育 目 次
 — 第八十九卷 第四号 —

© 1990
 日本幼稚園協会

人間の成長における行為の意味

持つことと失うこと(4).....津守 真(4)

心の豊かさを求めて.....村石 京(10)

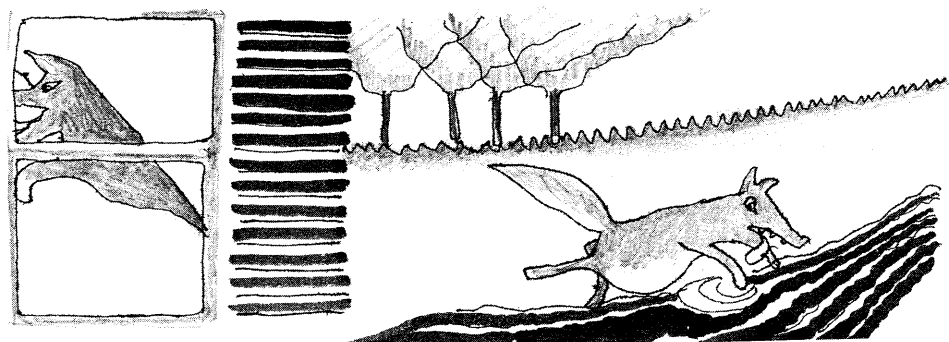
園庭より

たまご.....松井 とし(14)

特集〈はじまり〉

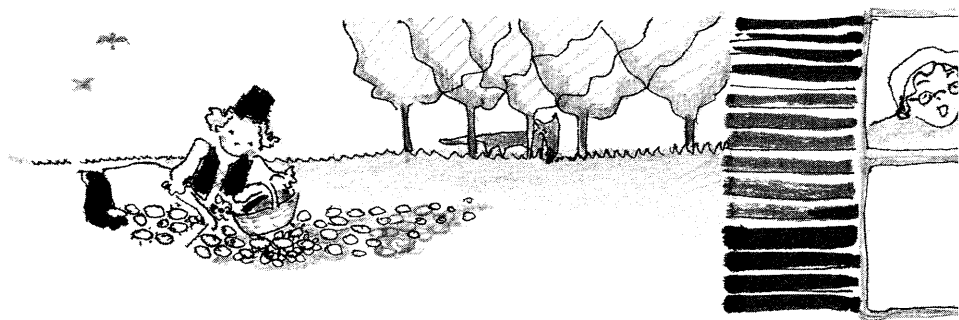
「はじめて」のはじまり.....三井マリ子(16)

「はじまり」について——書の世界から.....小川 清実(22)



「老い」の始まり.....	福沢 一吉.....	(26)
初心忘るべからず.....	松尾 葉子.....	(32)
一粒の麦.....	赤羽美代子.....	(35)
いのちの始期.....	中山まき子.....	(40)
言語障害の臨床研究ノート(1)		
私の症例報告——純粹語聲.....	村上 敏子.....	(46)
若いお母さんたちへ		
オランダ便り.....	向山 陽子.....	(54)

表紙イラスト・林 健造
扉題字・堀合 文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田 理恵
編集委員・本田 和子
豊田 一秀・上坂元絵里
編集部・大沢 啓子



持つことと失うこと(4)

「ある」から「なる」へ

津守 真

三学期のある日

三学期の一日、いろいろの子どもが自分で遊んでいるのを、私は感心して見ていた。遊びながらときどき私を見ている子もいる。手をひきにくる子もいる。しばらく一緒に過ごすと、じきにひとり何かをしはじめる。ひとつひとつを取り上げれば、とるに足りないような小さなことなのだが、毎日と一緒に過ごしている者にとってはそれらの日々と重ね合わせて驚くことが多い。どの子も何かをやろうとしている。

裏庭で先生が燃している焚火に、せっせと落ち葉を運ぶ子がいる。長い間、学校の外に出たくて、毎日のようにだれかがついて散歩にいった子どもである。ひとりで縄梯子を揺らしている子がいる。



先生を連れて職員室にゆき、チューブの糊をしぼり出してベトベトをつづけていた子どもである。真赤な顔をして水道のホースを取り合っている子もいる。以前には自分から動こうとしなかった子どもである。トイレットペーパーを流すのをつづけていたあの子どもは、土を掌の中で丸めて柵の向こうに投げるのを長い時間やっている。数え上げるときりがない。

満足して遊ぶこと、つまり自己実現とは真の自分を発見する途上にあることだろう。人が何かにとらわれているときには、真に自分が求めているのは何なのかを模索しながら、それがまだ発見できていない。そのときには、子どもは一緒にそれを考え探してくれる大人を必要としている。こうしてその糸口を見出し、それに向かって歩きはじめたときが、子どもが自分で遊びはじめる時だろう。真の自分は何かを見出す人生の旅は、幼児期にはじまって一生つづくのであろう。

真の自分という、仮の自分や偽りの自分があるのかとの問いが生じる。これはことほの上だけの問いではない。だれもが実際にその両方を体験しているのではないだろうか。自分が本当に納得しないままに何かをさせられ、体裁だけ保ってやっているとき、人は真の自分の道を歩んでいない。たとえ外見上は人と円満にやっているようでも、自分がそこに生きていないことがある。子どもにも、仮の生活ではなく、真の自分となって歩む生活をさせたい。人が直面する状況はたえず変化するから、新たな状況の中で真の自分を発見し直す旅は終わることがない。

真の関係を求めて

真の自分の発見は、個についてのみでなく、関係についても言える。人は真の関係を求めている。

相手も自分も、それぞれが真の自分を発見するのを助けるような互いの関係をつくるという課題である。「もつ」関係から「ある」関係へ、そして「なる」関係をつくり上げてゆくという課題である。

子どもと大人との関係を考えるとき、最初は大人は子どもを保護するという面が大きい。危険な所に行かないようにたえず見張っていないなければならない時期もある。子どもは大人に監視され、大人の勢力圏の中に入れられていると感ずることもあるかもしれない。その位にしないと守れない時期もある。そのときでも私は可能な範囲で「ある」関係をつくる努力を欠いてはならないと思う。子どもが自分で移動し、自分でしはじめたことを尊重すること、未知な世界を内に秘めた存在として畏敬をもって接することはできる。

T夫が土の塊を掌の中で丸めて柵の向こうに投げるとき、石ころが中に入る。窓にぶつからないようにとの心配が先に立つと、私の目は監視者の眼になっている。私はT夫の傍に腰を下ろして見ている。それだけでT夫との間にゆとりができる。一緒に土の団子をつくって手渡すと、T夫は優しい目で私をのぞきこむ。私の心の持ち様によって関係は一瞬にして変化する。そしてT夫が土を投げる面白さは、それが金網にぶつかって音を立てることにあると私は気付かされる。そうすると私も一緒になっている音を立てる物を探す。「得ることと失うこと」の意味を発見した後のT夫の行為のひとつである。それからあとT夫は危げなく半時間も自分で遊ぶ。子どもは自分で意味を発見する経験を積み重ねることによって、人間的に発達する。それを一緒に経験することによって、大人自身も強められ、一步深く人間を理解する者となっている。

「もたれ」「共にあり」そして「なる」関係へ

S夫が私の手をひきにきた。自転車につれてゆく。S夫がサドルに坐り、私が荷台に腰かけて、S夫がこいでいるかのように動かして欲しい。こうしてホールをひと回りすると、K男が荷台の私とサドルのS夫との間に乗って、「オモイ オモイ」と言う。K男が重く感じているわけではないのに、こういうことばを発するのは愉快である。子ども二人を乗せた自転車を動かすのは本当に重い。

午後からS夫は補助輪付自転車にひとりで乗って動かしていた。ひとりで苦勞しているが場所によってはなかなか動かない。とうとう私が手をかして庭を何度も往復した。

S夫はいま二年生である。二年生になったときから、彼は自分で次々と遊びを見つけて遊ぶようになった。一年生のときは、ほとんど一年間ブランコで過ごし、大人の男性が傍に居ることを要求した。その最中にはいつまでこれがつづくのかと思わされた。S夫は大人をはなさず、大人を「もつ」関係を求めたし、大人はS夫に「もたれる」者であった。保育者の側からいえば、その子が強くそれを求めるのには何か意味があるのだらうと、その子の内なる課題と向かい合おうとした。父親を失ったその子は、大人の男性に対して未解決な精神的課題が残されていても不思議はなかった。私は「もたれる」関係の中で、「ある」関係をつくらうとしていたのだと思う。

S夫は更に一年前、幼稚園のとき、校長室のソファで毎日のように私の膝の上に寝て何もしないで過ごす時期があった。そうしている間にこちらも心をきめてゆったりとした気分になると、そろそろとその子は自分で動きはじめるのだった。ある日、新しいサインペンを机の上に垂直に立てて並べ、

自分から何かをするぞと私の手を引いてホールに出ていったときのことを私は以前に記したことがある。(88巻8号)そのときにやったことが三つあった。ブランコとトランポリンと自転車だった。そして最後に大便を一杯してその日を終わった。その頃、この子は大便を少しずつ日に何度もやって、いちどきに排出することがなかった。精神的にも思い切つて自分を表出することがなかったのだらう。その三つの遊びのうち、ブランコはそれから一年以上つづいたが、あとの二つはしばらくの間全くせず、その日のことは偶然だったのかと思つていた程だった。一年以上たつてから、トランポリンを大人と一緒に長時間とぶ時期があった。それにつき合ふと膝がガクガクになった。そして補助輪付自転車にひとりで乗ることをはじめたのはごく最近のことである。

最初に自分から動きはじめたときにやった三つの遊びを、長い月日の毎日をへてすべてやり抜いたのをいま見ることが出来る。こうしてS夫は自分で遊ぶ者へとなつていった。私もまたS夫に「もたれ」、「共にあり」、そして「なる」関係へと、関係が変化してゆくのを見た。

大人も保育によって新たにになる

私は前日からいろいろなことがあつて気持ちが落ちこんでいたが、子どもたちの保育の場に身をおくと忽ちそれがなおつてしまう。これは私だけでなく、保育者に共通の経験のようである。それは、子どもとの関係の中で、「ある」から「なる」へと関係の成長を体験することによるのではなからうか。

暖かい冬の一日、S夫は陽のあたる庭にふとんを持ち出して寝ていた。こんな邪魔なところにねてと私はふとんを蹴とばしそうになった。そして気が付くとS夫の眼は青い空を見ている。

ふと私は少年の頃を思い出した。凧を上げた青い空、糸が切れて小さくなって見えなくなるまでみつめていた。櫛の梢の枝を透かして見た空、とんびがゆっくりと羽をひろげて滑っていた大空。空は少年の思い出と切り離せない。

大人になって長い間、私は空を見上げるゆとりを忘れていた。地上の煩わしいことだけが眼中にあった。ある日、歩きながらふと深呼吸して空を見上げたとき、少年の時の空の記憶が甦えった。そのときから私はときどき空を見て深呼吸するようになった。空を見上げるとき、大人も少年になる。

子どもと交わるとき、それを契機にして、大人は子ども時代に回帰する。それによって子どもの心に共感し、自分もまた今日の一日の歩みを新しくされる。これは保育する者の特権ではないだろうか。

(愛育養護学校)

心の豊かさを求めて

村石 京

一九九〇年代がはじまり、二十一世紀の幕開けもそろそろ近くなってきた感じのする此の頃です。二十一世紀ははたしてどのような世の中になっていくのでしょうか。

一九八九年の一年間をふり返って見ると、日本では昭和から平成へと時代が変わりましたが、社会全体の動きはめまぐるしく、政治は混迷を極め、人の心は決して平静であったとはいえないような年でした。しかしそれでも日本では幸せなことに平和な一年でありましたが、眼を世界各国に転じるとその大きな変革変貌に驚くこと

が多くありました。そしてその改革のために多くの人々の血が流されたのも事実です。私にとって衝撃的だったのはベルリンの壁が取り壊されたことです。

一昨年秋、文部省からの海外研修派遣団の一員として世界の国々を訪れた折、西ドイツから東ドイツへと国境を越え、そして東ドイツに数日滞在後再び西ドイツへと戻って来ました。その際、ベルリンの壁を眼の辺に見ながら、厳しい検問を受け通過しました。緊張しながら長時間待機してやっと国境を越えたときの安堵感と、何故

こんな壁がという異様な思いとが複雑に去来したことを覚えています。そして壁一つへだてただけなのに国状の違いがあり、不自由さの中にも夫々の国民が自分の国を誇りに思う信念をもっているかの如く旅行者には受けとられたのです。あれからわずかの年月の間に双方の国民の間に蓄積された思いが力となり、自由を求める人々の手によってあの壁が取り壊されたということは、世の中の動きを象徴する出来事のように私には写りました。二年前の旅行の体験は、何か遠い昔の話だったのでしょうか。もう一度機会があったらヨーロッパを旅し、再びかの地を訪れ、この眼でよく見てみたいと思っっている此の頃です。

ともかくこの一年でさえ、世界は日々大きく変化しています。後十年経って二十一世紀が訪れる迄には、世の中はどのようなになっているのかは何か想像もつかないような思いがいたします。一九八〇年代の日本は繁栄の時代として、国は豊かになり、物は満ち溢れ、何かにつけて便利になりました。身近なことを例にとってみれば十

年前、私どもは夫々の家庭でワープロやビデオやコードレステレホンをとりつけ、休日には海外旅行を楽しむ世の中になると想像していたでしょうか。キャッシュレスで買物をしたりするのは、今ではもう日常的なこととなりました。しかし、こんなに便利で満ちたりた社会なのに、人々は満足し安定しているのでしょうか。決して一人ひとりが充実した世の中であるとはいえないと思います。物では満たされない何かがあって、その何かが欠けているという思いがあるからこそ、空しさの中に何かを求めて人々はあくせくと先を急ぐのではないのでしょうか。

一九八〇年代は物質の豊かさや新しい科学や、巨大な利益などが先行し、それに乗ることが時代の流れでした。そのため日本の国に古くからあった習わしやきたりとか、それにもなう礼節などは、時代が変わったとか、古くて不便だなどという声で切り捨てられてきました。勿論その中に折り込まれていた心も、切り捨ててきたのです。そして日本は盛んに国際化を唱えながら海外

へ進出して行ったのですが、現在世界の人々はそんな日本人を決して良くは見えていないとさえいわれています。物が豊かになって心が貧しくなったともいわれています。

私は新しい世紀の前の十年間の一九九〇年代は、日本の国にとっての地固めの時期であり、充実期でありたいと思います。もし二十一世紀が輝やける未来であり、落ちつきと明るさに充ちた社会をと望むならば、丁度幼年期が先への思いを一ぱいにしながらも、人間として将来への基盤づくりとしてしっかりと大地に根をおろしていかねばならないのと同じように、私ども一人ひとりが着実に将来の基盤となるものを培っていかねばならない時期だと思っています。

一九八〇年代を反省して、一九九〇年代は心の豊かさの時代にしたという声も聞かれています。この「心の豊かさを求めること」それは幼児教育の真髄であります。幼稚園の教育は遊びを通して一人ひとりの幼児の中に自発性・自立心・集団性・社会性・創造性などといっ

た大切な心が育つように教育しています。こういったことは外側から教えてわかるようなものではなく、子どもが友だち社会の中で日々遊んでいる間に、遊びを通して心の中に自然と浸透し、育っていくものなのです。幼児期は知識技術の習得の前に、人間としての基礎をつくる時期であると思います。人間の成長を植物に例えて見れば、植物は過剰な肥料を与え過ぎたり、いじりまわしたりすると良い成長が見られません。適度な水と太陽があれば、そのもの自身のもつ力で根を強く大地にはり、やがては太い立派な幹をつくり、枝葉を繁らせ、時期が来れば美しい花や実を見ることが出来るのです。人間も同じように基礎となるものを育てていかねばならない時期があり、これが幼児期なのです。幼児期はその人の人となりを培う大切な時期なのです。周囲は落ちついてゆっくりと見守っていくようにあります。

二十一世紀に生きる人間として何が大切かといえば、自らやる力、やる意欲を持つこと即ち自発性を持つことと、新しくやること、新しく考えること、自分の力で考

え出していくこと即ち創造性をもつことなどです。そしてさらに、人とともにあってその心がわかり、その喜びや悲しさがわかり、思いやりや優しきの心を持つことなわけです。これらは毎日友だちとともにあって、ともに遊んでいる中で、子どもの心の中に徐々に育っていくものです。日々の積み重ねがなければ、今日教えて明日覚えるといった種類のものではありません。その代わり、子どもの中しつかりと根づいたものであるならば、決して枯れることはなく、自分の力で豊かに大きく伸ばすことが出来るものです。遊びを通して幼児教育をすることの大切さはここにあるのです。子どもは遊びを通して人間の基礎を培い、豊かな心を育てています。子どもの遊びの中に含まれている諸々の大切な要素は、単に目の前で見えている「遊び」の現象にあるのではなく、そのこととは子ども自身も気づかないけれど、子どもにとっては意味の深く奥のあるものだとすることを教師も母親も理解していくようにしたいものです。

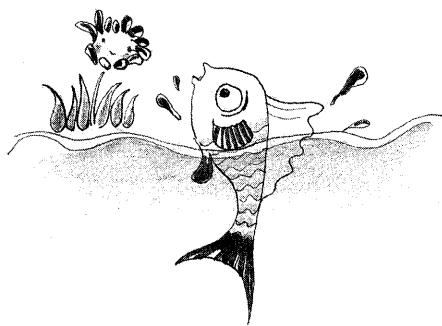
またさらに、こうした人間としての基盤である心の成

長には、周囲の与える影響も大きなものがあります。平成二年度より幼稚園新教育要領が実施され、その中で環境による教育ということが大きくとりあげられています。幼児をとりまく環境の中の人的環境として、教師や母親の考え方やものの感じ方が幼児に大きな影響を与えることはいうまでもありません。人とともに喜び悲しむ心や、美しいものや小さな出来事などに感動する心を子どもに求めるならば、先ず大人自らがその心を持つことが大切なのです。私も子どもとともに人間として成長しながら、充実した一九九〇年代を送るようになりたいものです。豊かな感性、深い思いやり、優しい心などは二十一世紀になっても勿論、新しい科学の時代が来ればこそ、ますます人間の味わいとして大切にされていくものとなるのではないかと思えます。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

たまご

松井とし



十五年前の春、私は一つの選択を迫られていた。当時、研究者のたまごとして通い慣れた大学で、自由な生活をしていた私のところへ、幼稚園の現場での仕事の話がふつてわいた様に持ち上がった。私は、大いに悩んだ。なぜなら、私の知る限り幼稚園の現場はひどく混沌とした所であった。さまざまな保育観、保守的で狭い女の園、お絵かきやおゆうぎと称される保育内容等。これらの全てが私を不安にした。が、もっと深いところで私は悩んだ。実のところ、私は子どもがあまり好きではなかったのである。

そもそも児童学を専攻したのは、将来子どもを育てる時に役立つだろうからといった、あまいで甘い考えに依るものだった。こんな風に迷い込んだ児童学の道は果てしなく、求

めれば求める程、いつ迄たってもボールをかぶったまま、私はなかなか真の児童学の意味するものと出会えなかった。

研究室時代、付属幼稚園の子どもを観察するセミがあった。まわりの人たちは、ささいな子どもの動きをとり上げては、楽しそうにいろいろな角度から現象学的に考察する。心の奥深く、子どもが苦手であるという負い目を抱く私は、その場にいる事が苦痛だった。

では、何故、いばらの垣根を越えてまで幼稚園という不可解な現場へとび込んだのかと言えば、たまごはまさに割れる寸前だったのである。その上、それ迄避け続けてきたにもかかわらず、なお、保育者への道がひらかれた、と運命的なものを強く感じたからであった。

今にして思えば、たまごの私自身に存在していた幼児性が、子どもの存在と反発し合っていたのかも知れない。多くの子どもたちとの生活によって、未熟だった私の幼児性は磨かれ、今では子どもとの心に共感し、理解する際の根幹をなしている。

あの時の選択は、私の生き方、そして人生をも変えることになった。遠まわりの人生ながら、たまごの頃の全てが生かされている現在の充実を、感謝せずにはいられない。

(神奈川県立横浜幼稚園)

「はじめて」のはじまり

三井マリ子

そもそものはじまりは何だったんだろう？

あの日の電話だったんだろうか。

「ねエミツイさん、この間話した件だけど、真剣に考えてくれる。もう時間がないのよ」

こんな電話が職員室にかかってきたのは一九八七年二月の中旬。高校の英語科職員室は、学年末試験、大受験を控え、あわただしさもピークに達している頃だった。

「エエ、エエ」(電話口で)

「ねえ先生、また後でようか。長くかかるんで

しょ」(私の横で)

「ハイ、わかりました。ここ職員室なもんですから。また後でこちらからご連絡しますので」(電話口で)

分詞構文から接続詞に転換する時の方法がサッパリわからないと私を待っていた生徒たちは、受話器を置いた私にホッとして、さっきの質問を続けた。

部屋の向こうでは

「君イ、これじゃダメだよ。そんな甘いもんじゃないよ」



と声を荒げて叱っている教員と、

「ハイ、がんばります」

と紋切り型の応答をする生徒。

二月の職員室は、毎年のこととはいえピリピリしたふんいきと、もうすぐ新しい門出を迎える晴れがましさの入り混じった独得のムードに包まれている。真新しさでいっぱいになる四月とは違う、何か次に新しいことを待ちうけているような季節。それが二月の学校である。

私は、そんな季節の学校に飛びこんだ電話の二週間後、この学校——都立駒場高校——を退職した。この高校の生徒たちを最後の教え子にして、十三年間の英語教員のキャリアにピリオドを打ったのである。

実は、自分の住んでいる地区の都議会議員（どんな人が出ているかも知らなかった）が、突然亡くなったので補欠選挙がある。土井委員長をはじめ社会党は女性の議員を出したがっている。口を開けば男女ビョー

ドーを言ってきた三井さん、出てくれないか。

こんなお話に、はっきり「ノー！」と言わなかった私は、どんな具体的にせまっておきそいに驚きながらも、「やってみてもいいかな……」と思いはじめ、友人たちに相談をもちかけた。

退職するまでの二週間、私のもとにはあちこちからさまざまなお知らせが届いた。

「補欠選挙？ 一人でしょ、勝つのは、無理よ。」

「もう七人も出馬している？ 当選の見込みがあれば社会党から男性が出るわよ。でも、やってみたら」

「いくら土井さんが委員長でも社会党はオジサンの党よ。組合中心なのよ。男社会にとりこまれるだけよ」

「投票まで一ヶ月ちょっと。惨敗したらみじめだな」

「からだかそんなに丈夫じゃないのに。選挙ってそれはそれは大変。駅前で寒空の中、立ってあいさつなんかするんですよ。あなたには苛酷すぎる」

「男性区議に出馬意志のある人がいるらしい。区議

と応える粕谷議員。おもしろい不協和音だった。

三十八歳でお嬢さまでもないだろうに、と思いがながらも赤のスーツでは政治家にふさわしくないだろうかと不安になった。でも「原始女性は太陽だった。今も女は太陽です。太陽の赤がシンボルの三井マリ子」と叫ぼうと決めていたので、どうしても赤にしたかった。

女の政治家のイメージが暗かったのは地味だからだ。落ちてもともと。私は私のカラーを出して明るくやってみよう。こんなにも出遅れてるんだもの、ハッと息をのむような作戦でいなくっちゃ……。

たかが一着のスーツを買うのに人知れずまたまた悩んだ。

こうして決まった真赤なスーツを身につけ、翌日、スタジオに向かった。

せいぜい十回ぐらいのシャッターで終わりかと思っていたら、とるわ、とるわ、六十回以上もとりまくった。

「ハイ、笑って。そう、そう、明るくねっ」

顔はひきつり、なかなか自然な笑顔は出てこない。

生まれてはじめてのスタジオでの本格撮影。モデルさんの仕事ってキツイんだなあと、妙なところで他の職業に同情したりしているうちにポスターの写真撮影が終わった。

今度は、ポスターのコピー（キャッチフレーズ）を作る作業が待っていた。いわゆるスローガン調の「売上税反対」とか「反核反戦」とか「反中曽根路線」とかの画一的文句はイヤだった。もっと別の方法で新しい世界のはじまりをうち出したかった。柔らかく斬新なイメージをふくらませるような何か。私らしい何か。私の考えていたイメージにピッタリの躍動感あふれるコピーを友人たちが考えてくれた。

「ねえねえ、これいいでしょ。絶対よ」

と見せてくれたのは

「女たちのマリ子」

男たちもマリ子」

リズムミカルで、シンプルで、時代感覚にあふれ、一

目見て気に入ってしまった。赤いスーツを着た私の上半身をはさんで、右側に「女たちのマリ子」、それより気持ち下げたところの左側に「男たちもマリ子」という文字が並べられ、ポスターが完成した。

ところが、長年、社会党の選挙を支えてきた人たちは、

「こんなスローガンはじめてだ。これじゃ闘えない」

「なぜ男たちもマリ子なんだ。男女平等を主張する人ならなおのこと、女を先に出して男を補足的に出すなんておかしい。『男たちと女たちのマリ子』にしたらどうか」

有史以来、女は常に男の脇役・付属品だった。女を主人公にしたとたん見えてくる男たちのとまどい、抵抗、失望。選挙を一度もやったことのない私の友人たちは「経験者の意見を大事にした方がいいのだろうか」と、しだいに自信がなくなってきた。それでも結局、女の運動を続けてきた私にふさわしいやり方で進

むことになった。

「女たちのマリ子、男たちもマリ子」は、新鮮な感激を呼び、街中にポスターがあふれる頃は、小学生まで、このコピーを口に出し始めた。自分たちの感性を大事にしてよかった、とつくづく思った。

生まれてはじめてのポスター作りにはじまって、投票日までの期間、なんとおびただしい数の初体験を重ねたことか。

生まれてはじめて、駅前に立ってマイクを握った。
生まれてはじめて、自分の名入りのタスキをつけた。

生まれてはじめて、ポスターをはりまくった。

生まれてはじめて、駅の広場で歌って踊った。

生まれてはじめて、宣伝カーに乗った。

生まれてはじめて、紹介もされない人たちと握手を交した。

生まれてはじめて、白い手袋をして大きく手を振った。

生まれてはじめて、労働組合の大会であいさつをした。

生まれてはじめて、小学校の体育館で演説会をした。

生まれてはじめて、うぐいすボーイズを誕生させた。

生まれてはじめて、社会党の中身をちょっとのぞいた。

数えきれない「生まれてはじめて」を重ねて、私は杉並区の補欠選挙のたったひとりの当選者となった。

高校教員を退職して三十八日後のことだった。

私の出馬動機は、女性の声を政治に反映しなかったからに尽きるのだが、私は自分の当選そのものが、女性の政治参加に寄与したのだ、と思い感無量だった。

東京都には一二人の議員がいるが、女性はたった九人。七%だった。九三%が男性で占められていた。

天の半分は女が支えているにも関わらず、政策決定の場に、女は余りにも少なかった。公約を実行する以前

に、女である私の当選ということ自体が、公約実現第一号となった。

さて、この補欠選挙での「奇蹟の当選」から二年半。議員になってからも初登壇、初質問、初視察、初委員会と、たくさん「生まれてはじめて」をくりかえし、去年の夏には、初の通常選挙をクリアし、今、私は二期目の議員生活をはじめている。

今の都議会の女性率は十三%。つい昨夏までの七%が倍増したのである。もちろん東京都議会初の一割突破だ。都道府県レベルの地方自治体中、これだけ多くの女性が登場したのも、今回がはじめてだ。

女性が参政権を得て四十余年。

選挙権はもうすっかり使い慣れた。ところがもうひとつの参政権である選挙される権利——被選挙権の方はいっこうに使っていない。男たちは次から次へと使いこなしてきたのに。

今まで使いそびれていた被選挙権を、ようやく女たちは行使しはじめた。使い慣れていないから失敗も多

いことである。

筆

どのような筆で書くのかは、作品に大きい影響を与える。たいていは馬や豚の毛からできた筆だが、羊毛の筆はやわらかく、人の赤ちゃんの産毛でつくられた筆はさらにやわらかい。やわらかい筆は、なかなか使うのが難しい。やわらかい筆は、異なった味わいがあることもあるが、やはり無理をせず、普段つかいの筆で書くことになる。

紙

様々なタイプの和紙の中から、自分がつくろうとする作品にもっともふさわしいものをえらぶ。墨をたつぷりと吸いやすい和紙にするか、ほとんど吸わないものにするか、あるいは、筆のすべり具合がよいものにするか、筆が紙に引っ掛かるような具合の紙にするかなどを考えてえらぶ。

墨

この墨の用意が、直接的で、最も基本的なものであろう。なぜなら、一枚の紙を書き上げるのに、必要な墨の量をたっぷりと用意しなければならぬのだから。大きな作品を仕上げるときには、相当な量の墨汁が必要である。どのように用意するかというと、とにかく、時間のある限り、墨をする作業を続ける。墨をすりながら、作品をどのように仕上げていくのかを、イメージしていることが多い。紙にはまだ直接書いてはいないが、一枚の紙に字をどのように置くのかを、墨をすりながらイメージしているのである。筆の運び具合いや、筆の速度などをイメージしながら、墨をする。

ある程度の濃さの墨汁がたまったら、これをガラスびんのような、別の容器にあげておく。こうして、墨汁を常に用意しておく。夏には、墨汁は腐ることがあるので、冷蔵庫に入れておく。この墨汁を書く

識したり、頑張ろうと、張り切りすぎたりしては、途中で息切れしたりして、続いていかない。一枚の紙に向かって、筆をもって対面したときには、それまでの不断の努力の結果などはすべて忘れ去り、無欲に、静かに、そして全身の神経を集中して、取り組んでいくことによって、その人のもっているパワーが噴き出していく。自分が日常の中でできてきていることを、素直に、力まずに、一瞬一瞬の行為の中に発揮するかどうかよい作品を創り出す条件といえるだろう。そのような時には、書き手は、筆と紙と墨の作り出す質の世界に自分を投入させ、自ら筆の動くままに表現がなされる。そこに「はじまり」があるのである。

言い換えれば、常に「はじまり」はあるのである。今が「はじまり」、一瞬一瞬のすべてが「はじまり」ともいえる。反対に「おわり」はない。ある作品を、期限によって、一応終わらなければならぬとしても、それで「おわり」ではない。また新しい「はじま

り」がはじまる。この連続である。

「書」の世界は、一瞬一瞬の時間性にかかわる表現の分野である。その意味で、まさに子育てと同じなのではないだろうか。子育てのはじまりはいつなのか。赤ちゃんが産まれたときなのか、あるいは、赤ちゃんが母親の胎内にいることがわかった時なのか、あるいは結婚したときなのか、あるいは結婚しようと思ったときなのか、あるいはそれ以前なのか、すなわち、「いつ」が「はじまり」とはかんたんに言えることではないようだ。ということは、いつでもが「はじまり」といえるのではないだろうか。

不断の努力の中で、気張らずに、無理をせずに、一瞬の「はじまり」を受け入れていくことこそ、自身もっている力が、総合的に発揮することができるのだらう。

(埼玉純真女子短期大学)

であるからである。「老いがいつ、どう始まるか？」という問いは、様々な立場から様々に答えられる。ここでは、「老い」がいつ、どのように「始まる」かを探る手だてとして、まず「老い」を生物学的に考えてみることから私の話を始めてみよう。

つい先日のことである、友人の理論生物学者と話しをしていたところ、「老化」に関する彼の面白い持論を聞かせてくれた。彼は鞭毛・繊毛といった微細生物の運動器官に見られる自律的な動きを理論的に研究しているのであるが、これらの器官がある「動き」を起こすには、その器官がたったいま作り出した自分自身の形態を次の瞬間には変化させる必要があるという。言い替えると、新たな場所に移動するには、一旦安定化した自分の状態を動かし、その安定状態をもう一度崩さなければならぬ訳だ。つまり新たな安定性のためには不安定性（柔軟性と置き換えてもよいと思われるが）が不可欠なのである。この考えを先ほどの生命システムがたどるステージに当てはめてみると安

定性と不安定性のバランスが取れている状態が健全な成熟期であり、不安定性に偏るのは「成長期」であり、安定性に偏るのが「老化」とのことである。安定性に偏るのは何故「老化」なのであろうか？ 生物は自分の体を組織立て、固形化する能力をもつ（分化という）が、この固形化は一種の安定化である。安定化が起こると局所的には不安定（細胞分裂などがそれにあたる）が生じて変化が生じる。この安定性と不安定性の主導権争いの末、最終的に安定性に終止していくプロセスが老化のプロセスであると考えられるのである。ここでは「老化」は成熟の後の最終ステージとしてはじめて出現するのではなく、生物の発生時点から既に始まっている。つまり、固形化によって生命体の中で時間の流れが不可逆性を持つに到った経過がすでに老化のプロセスなのである。

生物学的に「老い」の始まりを考えると「老い」は受精の瞬間から始まっているということになりそうである。心理学的実在としての「老い」が生物学的「老

い」に対応するかどうかはさて置き、生物学的プロセスとして「老化」を捉えると心理学的にも解釈可能な「老い」の始まりが見えてきそうだ。

ひとつの観点を示してみよう。現在ある自分をより「豊かに」するために、またより「活性化」するために、今の自分を変えて、新しい自分を作ること仮に心理学的「成長」と呼ぶことにしよう。「現在ある自分」が不安要因であったのに対して「新しい自分」をつくり出す推進力は不安要因と言える。心理学的「成長」にはこの両要因が必要なのではないであろうか？ 人間の活動性を保つにはある程度のストレスが必要であるとする考えもあり、このときのストレスは不安要因に他ならない。この種のストレスは自分自ら作り出せるストレスでもある点が重要である。ストレスが過剰な状態も、ストレスが全くない状態もバランスという点からすると健全な状態ではない。健全な状態、または心理学的「成長」とは、推進力としての適度なストレスを自分から作り出せ、しかもそのスト

レスをプロダクティブに消化し、自分自身がもう一つ高いレベルで再安定化できること”かもしれない。このように考えて行くと、安定に安住し、推進力としての不安定性を自ら作り出せなくなる時期を「老い」の始まりと見ることは出来ないであろうか？

例えば、今の状況は安定しているが不満も蓄積してきた。不満を解消すべく行動すれば今の安定した状況も捨てなくてはならない。状況を変えるにはリスクも伴う、しかし新しい状況をつくり出せば多くの不満が解消できる。このような状況下での不満は不安要因であるが、その不満がさらに一つ高いレベルで再安定化するための原動力になるかどうかはその個人の「老い」を考える際の手がかりになるかも知れない。

「老いの始まり」…認知心理学的解釈

去年（一九八九）の秋、京都大学基礎物理学研究所で、「動的脳観」と題するシンポジウムが開かれた。その折り御一緒させていただいた東大の佐伯胖先生か

らギブソンの生態学的認知論、およびナイサーの知覚循環説に関する面白いお話を伺った。生態学的認知論、知覚循環論に含まれる諸概念は「古い」の始まりを考えるにあたり、認知心理学的ヒントになるものではないかと思われる。佐伯先生のお話の一部を私なりに解釈しながら要約してみる。

ギブソンによれば生体が外界を知覚する際、感覚された「表象」を単に物理的情報として処理するのではなく、生態学的に重要な情報を外界から「抽出」する。この時、生体は外界の“affordance”を抽出する。“affordance”とは外界の事物が生態の生存と活動に供するように内在している情報のことをさす。例えば椅子は人が「座れる」というaffordance情報を、平らな面はそこを「歩ける」というaffordance情報を、絶壁は「落ちる」というaffordance情報をそれぞれ持っているが、これらの情報は外界と生体の相互作用により初めて生じるものであり、外界にも、また生体にも存在する情報ではない。

この“affordance”のことを佐伯先生は確か“活動誘発性”と言っておられたと記憶しているが、この概念を私の観察した具体例を通し私流に解釈してみよう。このお正月に友人のお宅に家族でお邪魔した。火鉢の鉄瓶の湯気が居間を豊かにしてくれていた。六歳半になる私の娘が美しく線のひかれた火鉢の灰を灰ならしてでなくては、それを灰に差し込む動作を繰り返し返した。その動作の適切性が妙に印象に残った（と言うのは娘が火鉢というものを見たのがこれが初めてではないかと思ったからである）。火鉢の灰もそして灰ならしもともに“affordance”情報の高い、人に何かをさせずにはおかない（もの）なのであろう。灰をいじる気持ち良さが人の体性感覚（私はこの感覚が人間の存在にとって根源的感覚であると信じているが）を刺激する。生態学的に重要な「意味」が生じないはずがない。人に語りかけるのもう一人の人とは限らない。外界（もの）が語りかけてくる場合もある。（もの）が仲介になり人と人との間に関係が生まれることもある。

〈もの〉側からの「活動誘発性」はいたるところに内在する。そのとき〈もの〉に語らせる役目を〈もの〉とあい対する人が少なくとも半分は担っている訳だ。

佐伯先生のお話に戻ろう。ナイサーはギブソンの考えをさらに押し進めて「知覚循環説」を提示した。ナイサーによれば、生体は自らの「認知的枠組み」をもって外界を探索し、対象からのaffordance情報を利用してその「認知的枠組み」を改変する。彼は改変された「認知的枠組み」が更に新しい探索方略を生み出し、外界を探索するサイクルを想定した。ここで重要なのは「認知的枠組み」が外界の受容に留まらず、現在の情報から次の情報を内的に生成し、「あらためて」外界を見るところという生成的メカニズムを持つ点である。生体はいまあるがままの環境に安定して適応するだけでなく、新しい環境への備えを持ち、積極的に探索もするし、内的制約を修正していく存在である。ナイサーの考えをまとめると、生体は外界からのaffordance情報を生成的メカニズムをもつ「認知的

枠組み」を通して取り込み、既存の枠組みを常に修正し、それにより更に新しい探索方略をつくり出す活動的、生成的存在である。

ここで私なりにナイサーを焼き直してみよう。例えば、自分の考えがまとまり「安定」する。それに満足するだけでなく他人の意見を取り込んだり、影響をうけたりしてその考えが一時「不安定」になる。ついで内的な修正がおこる。しばらくして「再安定」すると以前の考えより良くなっていることに気づく。「再安定」した考えはさらなる取り込みや影響により「不安定」になる。人はこのようなサイクルを体験する。「自分がない」訳ではない。むしろ生成的「認知的枠組み」が健常に働いている証拠といえよう。ひとつのサイクルの終了は「あらたな」目でものを見るあらたな自分を生成する。反対に、自分の意見に「こだわらな」自分が「いこじ」になる。「片意地」をはるといった現象は「認知的枠組み」の生成性の消失、サイクルの機能低下を意味するのではなからうか？

ナイサーを通して、生体は外界の情報を単なる物理的
情報として処理しているのではなく、外界に対する
自らの働きかけを通して生態学的に意味のある情報を
生成していることを知った。言い替えるなら外界に向
かっている自らの projection が外界の意味生成に重要な
役割を果たしていることを示している。

“Affordance” を「認知的枠組み」との関係で見ると
“affordance” の意味が更によく解る。この “afford-
ance” は人間の「成長」ないし「老い」との関連で考
えらる示唆するところの多い概念でもある。即ち、「老
い」の始まりをこの affordance 情報の生成低下が始ま
る時期、ないし生成が停止する時期とみる事が出来
ないであろうか？ 確かに、外界側の生体に対する働
きかけは不変なのかも知れない。しかし、affordance
情報の成立には生体側の参加が不可欠である。身の回
りで起っている様々な事柄から、自分が生きていくこ
とにとって重要と思われるものを選びだし、意味付け
し、取り込む。更に、それを基礎に身の回りの出来事

を新たな構えで見直す。このようなサイクルが自分自
身で生成できなくなってくれば、外界に対する意味付
けが不可能となり、ひいては生きることの意味付けの
喪失につながるのではなからうか？

生物学的老化をヒントに、安定に定住し、推進力と
しての不安定性を自ら作り出せなくなる時期を「老
い」の始まりと見た。さらに認知心理学における afford-
ance と「認知的枠組み」の概念をヒントに、“afford-
ance” 情報の生体側の生成の低下を「老い」の始まりと
考えてみた。二つの異なるヒントをもとに考えた「老
い」の始まりに何らかの共通項がありそうである。
「いつ老いが始まるか？」には一定の回答はない。あ
る調査によれば、「自分が老人である」と自覚する時
期にはおおきな個体差があり、50代から自覚する人が
あるかと思うと、80代でも「自分は若い」と思ってい
る人があるという。「老い」を享受できない「硬さ」
がすでに「老い」の始まりを意味していると解釈する
なら、この調査の80代の何人かはすでに「老い」てい

るのかもしれない。自覚の観点から「老い」を捉えることの一面性をあらためて考えさせられる。単に自分は「若い」とか、「年寄り」であるとかいう自覚だけでは把握しきれない「老い」の始まりがあるような気がする。

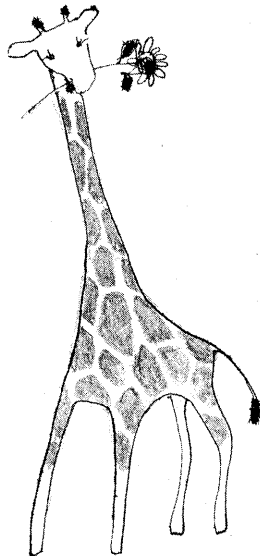
参考文献

佐伯胖著 認知科学の方法、認知科学選書10巻、東京大学出版会、一九八六

(東京都老人総合研究所)

初心忘るべからず

松尾 葉子



インタビューで何度となくたずねられる質問に「どうして指揮者になろうと思ったのですか」というのがある。私は、指揮者になろうと決意したのか、指揮をしたかと思っただのか、あまりよく覚えていない。それは、幼い頃から指揮者にあこがれていたわけではない

からだ。男性ならばパイロットや野球の監督、指揮者など、多くの人を統率する職業にあこがれるのだけけれども、女性の場合は少し違うように思う。私は小さい時からピアノのレッスンを続けていたので、将来はピアニストになりたかった。やはり舞台上で素敵なドレス

を着て演奏してみたいと夢みていたのだ。

結局、お茶の水女子大学の音楽教育学専攻に入学して、音楽の勉強を続けることになった。音楽教育のためには、いろいろな知識が必要ということで、ピアノを弾くことはもちろん、歌や作曲、音楽学など幅広い分野にわたって勉強しなければならなかった。大学三年生の時に、毎年音楽科が行っていた「オペラ」を上演することになり、曲目やオペラの配役、オーケストラ編曲、舞台装置などすべて学生が中心になって決めなくてはいけなかった。この時、私と「指揮者」という職業との運命的な出会いとなる。指揮法について何の知識もなかった私は、ほとんど独学で勉強するよりほかになかった。本を読んでも実際の指揮法は、ほとんど理解できず、オペラの練習を見学に行って学ぶことが多かった。今から思えば何とむちゃくちゃな指揮をしていたことかと恥ずかしくなるのだけれど、自分の思っていることを表現したいという意欲は人一倍もっていたので、何とかオペラを指揮することができ

たのではないかと思う。小さい頃からピアノを学んできた私は、たくさんの人と力を合わせて一つのものを築きあげるといっておもしろさにひかれ、指揮をするこの魅力にとりつかれてしまった。

ピアノという楽器は自分の思っている音楽を、そのまま表現できてしまう。一方、指揮をするということは、自分の思っている音楽を体で表現したり、説明して、オーケストラや歌い手に理解して演奏してもらうことだから、直接の表現ではなくなる。しかし指揮者とオーケストラの奏者の気持ちが一一致した時は、感動的な演奏になるわけで、一人でピアノに向かって演奏するよりもっと大きな感動を得られることになる。

大学の学園祭で初めて指揮をした時は、学生仲間のままごとのような練習だったと思う。その後、東京芸術大学の指揮科に入りたいと思い、受験勉強を始めたのだが、その当時は、女性の指揮者など本当に珍らしく、はたして入学させてもらえるのかと心配でもあった。指揮科に入学してから、むしろ本当の意味での勉

強が始まったと思う。指揮をするということは、車の運転と同じで、実地経験を多くした方がスムーズに音楽を表現できるし、オーケストラをまとめることにも慣れてくる。先生から直接レッスンで教わることも大変重要なんだけど、オーケストラの練習にたずさわって学ぶことが数多くある。たとえば、オーケストラのアンサンブルが乱れてきたらどうしたらよいのか、曲のテンポを変えたり、だんだん速くするのは、どのような方法が必要か、など頭の中だけで考えていてもうまくいくものではない。指揮法を学ぶには、ある種の訓練が必要で、できるだけ多くオーケストラを指揮した方が体得できるのである。

私が指揮を始めるきっかけになったのがオペラであったから、オペラに対する情熱はかなり強い。オペラを指揮するのとコンサートを指揮するのでは何が違うのか。オペラは、オーケストラや歌手、合唱、そして多勢の舞台関係者が力を合わせて一つの人間のドラ

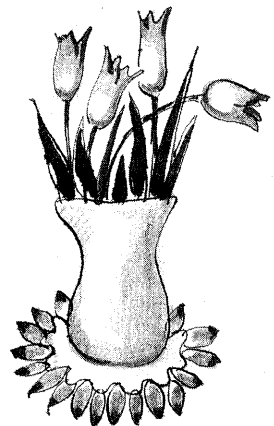
マを描くものである。多勢の力が必要となる。したがって意見のくい違いが時々生じる。音楽上の観点からと演出上のそれとは、かなり違うことがある。相手の意見を理解しようとしながら、自分の意見も通さなければいけない。オペラを上演するには、コンサートと比べものにならないほど準備に時間を要する。しかし、この練習期間が話し合いの場をもつ意味で大変おもしろい。

さまざまな問題を乗り越えてオペラを上演した時は、本当に感激することが多い。心の底から、お疲れさまでした、と言える瞬間である。この感激を味わうたびに、指揮者になってよかったと思う。そして運命のいたずらであった学園祭のオペラを思い出すたびに、「初心忘るべからず」と自分に言いきかせているのである。

(東京芸術大学・指揮科)

一粒の麦

赤羽美代子



母、寿尾は一九八八年一月八日、満九十九歳の高齢にて、この地上を去りました（あと、十五日にて満百歳を迎える筈でした）。

母は、地上の生活が終わる日迄、聡明で、心明らいた、可愛い、素直なお婆ちゃんでした。

我が家は、百歳を迎えようとするこの母を「永遠の若者」と思い込んでいる、樂觀家族です。その半面、母は我が家の珠の様なひとりっ子でもあると、暢気な思い込みに浸っております。

母も又、コロコロと良く笑い、良く語り、若い母親役と、丈夫で育て易い子ども役の、二役になりきりました。時どき私は「他所の子には輝しい未来があるの

に、家の子には未来がないなあ」と、明日をも知れぬ我が子の余命の短かさに、失望と淋しさを覚え、この現実を噛みしめる日も有りました。

以下、母の生前の日常の思い出を、幾つか記してみます。

第一話 約束 お墓 外国

ある晩、母と入浴の時、母は私に「長生きすると、皆に迷惑を掛けるばかりで申し訳ないね。時どき心配になる時があるのよ。私は死なない病気に罹っているのではないだろうか」と心配そうに語ります。「何言ってるの。そんな相談は迷惑よ。だまって百歳を越

えて下さい」「そうかい。これ以上の迷惑は掛けられないね。それでは百歳迄生きてみるよ」と指きりげんまんをして約束をしました。

又、続けて、いかにも母らしい発想を語ります。

「あなたは、クリスチャンにおなりだから青山のお墓（青山墓地）には入らずに、教会のお墓に入れてお貰いよ。青山に入っても御先祖様方とは、話が合わなくて、つまらないよ」と、真剣な顔で申します。更に話ぐすすみます。「あなたの様な性格は、どうも外国の暮らしが、性に合っているように思うのよ。日本はどこか考え方が、コセコセしているらしいね」「外国で暮らす時は、お婆ちゃんも連れて行くわよ」「あれまあ、オホホホ。一度行ってみたいね」その夜、母は何やらウハハハ、ウハハハと、真剣にうわ言を言います。「外国で迷い子になって、汗をかきながら道を聞いている夢を見た」との事でした。

「どこの国へ行ったの?」「それがね、テレビで見ただ、パリーの凱旋門の前に立っているらしいのよ」と

心細く、恐ろしそうに話します。一足先に出発とは、恐れ入りました。

第二話 生まれ変わるとすれば

午前零時、テレビから放送終了の音楽が流れると、母は、もう我慢の限界とばかり、むくっと布団から起き上がり、私に寝る様に促します。「さあ、自分のお部屋へお引き取り下さい。明日は幼稚園に可愛いお子さんが来るんでしょう?寝不足の先生では、子どもが見えなくなるよ」「ホラ、テレビがお休みなさいって知らせてますよ。ぐっすり眠って、明日は爽やか先生でいなければね」「おや、先生は、これからお風呂にお入りかい?既に明日に突入しましたよ」と、一生懸命に私を寝かせつけ様と努力を続けます。私はちよいとふざけて、母が座している布団の中に、ゴロリ、バタンと倒れますと「あら、ほら御覧よ。そんなに倒れる迄、起きていなくても良さそうなものに。困った子だよ。私はとっても抱っこして上げられませぬよ。ホ

レ、ホレ、今なら歩いてお布団に行かれるでしょう？」私は笑いをこらえて、母の枕をしっかりと抱きかかえ、寝た振りを続けます。「困った子だね、私はね、今度、生まれ変わるとすれば、寝つきの良い子を生まなければ、ホラ、風邪をひくよ」と、私が笑いをこらえて丸くなっている背中を撫でたり、叩いたり、努力を止めません。（それにしても、生まれ変わる事があつた時の、母性愛まで發揮しているのですから、楽しい事）

そんな時の私はふと、明日の幼児との関係も、こんな関係でもいいいな、なんて、思えたりする瞬間です。「お休みなさい」って可愛い声を？張り上げますと、母も「ハイ、御機嫌よくお休みなさい」と、ゴロリと横になります。そういう時の母は、決まって自分では掛け布団を掛けません。ボタンと横になると、ニコニコと笑って私を見えています。「本当に手が掛るんだから、自分で掛け布団位掛けるんですよ」と、私が母の寝やすい様に布団を掛け、首の辺りをトントン

と叩きますと「オホホホ。有り難う。明日又、元気で会いましょうね」と、早くも、スースーとネンネのお国へ出発です。気持ちの良さそうな寝顔だ事。

第二話 「御」の字

母が語る言葉は、単語の初めに「御」がよくつきます。或る日私が、「今日から『お』はつけないで話しましょう。特に自分の事には『お』を取りましょう」「そうかい。それでも、他所の方には礼を尽くさなければいけませんよ。普段の言葉が肝心なのよ。自分の事には『お』はつけないんだね？解りました」「お婆ちゃんだって、『お』が取れると楽よ」そんな会話をした後、母は少々いたずらっぽく「M子さん『茶、くれ』」と、ニコニコ笑って申します。「今、何て言ったの？」「だって今から、『お』を取るって言ったでしょう？ですから『茶、くれ』」と腕捲くりをし、胸を張って見栄をきります。普段は家人に「お茶をおくれ」と言う具合なのです。突然の母のいなせ

な、威勢の良い江戸っ子のお婆ちゃんに、周囲の者はな—る程と唸ったり、感心したり、終わりには母も家人も、お腹の底から大笑いを致しました。

後日、「御」取り事件が起こりました。(第五話にて記す)

第四話 母の入院

一九八七年十二月に、母は風邪をひき、食物を吐き、欠尿の症状も出てきましたので、急ぎ入院する事になりました。やがて救急隊員の方が、急ぎ我が家に入ってきました。母は白いヘルメットに白衣を着た、母にとって突然の侵入者の方たちに、大変驚きました。私と姉が床の上に座している母を支えていましたから、母は私たちが庇い守る様に自分の両手を左右に大きく広げ、力強くびしっと言いました。「何をなさろうとするんです。何をなさる気ですか」と一喝しました。私は慌てて、母に「肺炎になるといけないでしょう?病院に入って風邪を治しましょう。すぐ帰れ

るのよ」と申しますと、母は直ぐに理解してか、静かに考えている様子です。我が家との最後の別れが来たと、覚悟をした様子でした。が、直ぐに、しっかりと救急車の方に「御苦勞様です。よろしくお願いします」と挨拶をし、「火の始末は大丈夫かい?」と、気を配ってから救急車に乗り込みました。

車の中では、私の手を取って「お世話になったね。有り難う。有り難う」と言い続けておりました。

第五話 再び「御」の字

病院では、医師・ナース・付添いのKさん方より、可愛いお婆ちゃま、美人お婆ちゃま等と年齢を越えた素敵なお名前を戴いたのに、本人は只、一日中ス—と眠る時間が長くなりました。が、医師、ナースの方に大変な神経を配ります。「ハイ」「さようございます」と、しっかりした返事に、可哀相になる時があります。

或る日、私が病室に入るなり、Kさんが「今日は本

当に驚きました」と、目を丸くして語ります。「母に何かありましたか？」驚く私に「ハイ。もう驚きました。御隠居様を寝返りさせようとすると、『ケツが痛い』と申しましたので、聞き返しますと『腰が』と腰に手を当てます。日頃、淑やかな御隠居様が『ケツ』等と申しますので、もうビックリです」私は恐縮しつつKさんに「まあ、ごめんなさい。私の教育が悪くて。母は、自分の事なのでおケツの『お』を取ったんですよ」Kさんは、理解しがたい様な顔で、母の寝顔をじつと見つめていました。

第六話 返事

一月六日、母の容体が急変して、呼吸困難になりました。医師より時間の問題ですと告げられました。七日の朝方には、吐く息も力弱く、いよいよ私たちも覚悟を決めました。

そんな時、ナースの方が「赤羽さん」と大きな声で母を呼びながら室に入って来ました。全員が、その

声に驚いた時、意識の無い筈の母が、大きな声で、ひと声「ハイ」と返事をしました。その声の太く力強い声は、とても呼吸困難の中から絞り出した声とは思えません。全員、電気に打たれた様に、ショックで直立してしまいました。

日頃、百歳迄、生きる事が、私たちへの恩返しであると考えている母でしたから、私は臨終を迎えた母の耳に口を寄せて「今日は、お母様の百歳のお誕生日ですよ。お目出度う」と申しました。それは、母が胎内で生命を与えられた日より数えれば、百歳は越えているのですから。

私の一語で、母はホッとしたのか、私の手を握り返し、嬉しそうに天国へ旅立ちました。

〈はじめり〉

一粒の麦が地に落ち死んだ日より、恥ずかしながら、私の遅い遅い巣立ちが始まりました。遅過ぎた巣立ちの小鳥にも、広い空を翔ぶ時に必要な、丈夫な羽

が育てられ、準備されていた事を覚えます。

神様の呼ばわりの声に、隠れたりせず、どのような御用にも「ハイ」と御返事をして、このままの私を神様に表す事が素晴らしい事なのだと、遅い巣立ちの小鳥は羽を広げました。

残された者の心は、この日より多くの実を結ぶ為の作業がはじまったのです。失った実の大きさを感じつ

つ、得た実はいかに大きく、豊かな実が結ばれる事を信じています。

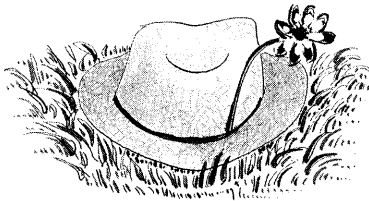
「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」

ヨハネによる福音書 十二章二十三節・二十四節

(靈南坂幼稚園)

いのちの始期

中山まき子



〈始まりさがしーそのー〉

「ねえ、始まったわよ、来る？」知人からうわずつた声で電話が入ったのは、梅雨明け前のある夕方だっ

た。私が閑静な住宅街の一角にあるマンションに着くと、当のご本人が「いらっしやい」と白いネグリジェ一枚の姿で迎えてくれる。こともあろうに、今から彼

女はここでわが子を産もうとしているのだ。

自宅を産小屋に選ぶ人は、現在では大変珍しい。一九八八年刊「母子衛生の主なる統計」によれば、八六年の全国出生数一、三八二、九四六人中、病院や診療所で出産する割合は九八%、助産院では一・七%、自宅にいたっては僅かに〇・一%、二、〇七一人である。

こうした傾向は一九六〇年頃を境としてたかだかこの四〇年ほどの間に激変してきた事柄の一つで、それまでのお産は専ら彼女のように自宅で、お産婆さんの助けをかりておこなわれていた。

ほどなく、助産婦さんが小さな鞆を持ってやってきた。「あれ、まだまだじゃない。寝てないで部屋を歩き回ってたほうがいいわよ」と助産婦さん。様式トイレに座ってたほうが調子がいいと彼女。やがて長女、長男と二人の子供たちが学校から帰ってくる。「まだ？お母さん、間に合った」といいながら宿題をはじめめる。連れ合いが慌てたように帰ってくる。そこへ電気屋の若いお兄さん、壊れた冷蔵庫の修理を依頼して

あったのだ。彼は冷蔵庫と格闘しながらも、この家であつたのだ。これから起こるらしいただならぬ事態を嗅ぎ取ってか落ち着きがない。陣痛間隔が短くなるまで、思いの外時がたった。いよいよ助産婦さんの鞆から一つまた一つと小道具がだされていく。

このマンションは彼女の嗜好から各部屋に区切りというものがない。三つの部屋には洒落た家具が程よく配置され、子ども部屋との境もすだれによつてゐる。母の苦しげな声や様は、外へ遊びにもいかず机に向かうふりをしてゐる子どもたちに刺すように届いてゐる。父はわざとらしげな声で、時折子どもたちに話しかけてゐる。父は反対してゐた。彼女の出産にふたりの子どもを巻き込むことを。しかしすでにおそい。

「頭がみえはじめたわよ」の声に子どもたちはもう我慢してゐない。恐る恐るすだれを越えて母の足もとに行き、頬づえをついて腹這いになる。二人を後ろから包むように「お前らん時も父さんちゃんといたんだぞう」。父はたちまち、今起こりつつある事態と今後

起こるであろう事態にたいする解説者兼教育者と化す。

今までの苦しさを全て帳消しにするかのように、するりと赤子の顔があらわれる。ワーと解き放たれたようなどよめき。と、あれよあれよと言う間に、助産婦さんの手にみごとに育った男の子が抱かれる。赤子と母の間にはよじれた臍帯がひどくなまなましく二人をつなぎ、U字型に垂れ揺れている。お父さんの出番だ。やや緊張きみのお父さん。ちょっと力足りず、はさみが曲がる。私たちはこのとき初めて、わずかな血の流れを臍帯の切れまにみたのだった。新しい命が、大勢の人に囲まれながら一人立ちを始めた。

私たちは命の始まりを、いとも素朴に誕生の日と決めているふしがある、少々分け知り顔で、いえいえ、胎児からすでに命ですよと反論する向きもあるうか。だが、命の始期という問いは実はそうそうたやすく答えを出すことができない難問なのである。

〈始まりさがし—その2〉

明治40年公布以来この方刑法第29章に「墮胎ノ罪」が記されている。自己墮胎、同意墮胎、不同意墮胎、業務上墮胎など、本文を記さずともその区分名からおよそが予想されうる墮胎状況に対して三月から七年以下の幅で、状況に応じた懲罰が記されている。明治末の国政下での命の位置付けを推察することができ、富国強兵を国策としたこの時代においては、胎児という命を無き者にするとは、処罰に値する行為だったのだ。だが、戦後昭和23年に「優生上の見地から、不良な子孫の出生を防止するとともに、母性の生命健康を保護することを目的」とした（傍点筆者）優生保護法が公布された。時はあたかもベビーブームの時代であった。この法によって、人工妊娠中絶が条件つきで認められ、「墮胎ノ罪」は事実上空文化した。優生保護法では人工妊娠中絶を「胎児が母体外において、生命を保続することのできない時期に、人工的に胎児及びその付属物を母体外に排出すること」と定義

した。また厚生省は生命を保続することのできない時期を28週未満の胎児と定めた。以上によって命の始まり扱いにはっきりとした線が打ち出され、不良な子孫の出生か否かという命選別の考え方も明確に打ち出された。

二つの法から私たちは、命の重みや命扱いの線引きが時の為政者の人口政策によって変わりうる性格を持つものであったことを見逃さずにおきたい。

さらにしつこく線引きの推移をたどろう。厚生省が昭和28年に打ち出したこの28週未満の胎児に限り人工妊娠中絶を認めた線は、昭和51年には24週未満へと短縮された。さらに13年ぶりの改定案として、昨年からの22週未満に短縮しようとの見直し案が省内で審議されつつある。線引き変更の必要性は、医療技術の進歩、保育器の改良、栄養補給技術の向上などにより、胎児が母体外で早期から成育が可能になったためだと説明する。医療技術の進歩によって、胎児期の命開始時期は手前にと引き寄せられていくのだろうか。

いえいえ、命は受精の時より始まっているのだ、とスタートラインをさらに手前に置くのは、とりわけ、ローマカトリックである。受精入魂と、さらに胎児は原罪を背負っているので洗礼を受けずに葬られると永遠に呪われるとする原罪との観念によって人工妊娠中絶を否定し命の始まり点を明確化する考え方だ。それぞれの宗教は自らの教義にのっとり様々な命の始まりや扱いを規定している。これは、国策や技術の進歩によって変わる可能性は少ないが、議論の余地を与えない程不毛の対立を包含している。

あるいは、近年急速な進歩を遂げつつある分子生物学の分野の知見から受精卵やその着床というヒトのメカニズムを次のように説明する分子生物学者がいる。「ヒト発生の初期における個体誕生の確率を追いますと、受精卵において $\frac{1}{3}$ 、着床後(2週間)で $\frac{1}{4}$ 、受精後6週間で $\frac{1}{5}$ 、18週で97%というふうにながります。従って母親は通常、自然に生まれる子供の数の少なくとも2倍の数の受精卵を「殺して」いるわけです。

す。(中略)従って、受精卵をもって人間生命の始まりとみなすことは、人間のもって生まれた独特さという点から見ても、人間へと発生していく確実さから見ても、これを決定的な一点とみなすことはできません。人間の生命は、原初の生命体からずっと連続したものであって、人間の生命が受精卵において突如として開始されるものではありません。(中略)問題は、しだいに人間になる確率を増しつつある、連続した過程のどの点をもって、ヒトと見なすか、にかかるわけでありませう」と。

〈新しい始まり〉

今までは既存の命の生成途上のどこに始まりの点をもとめるかというバリエーションに着眼してきた。しかしその一方で、まったく新しい方法による命誕生の技術が研究開発されてきていることを忘れてはならない。その第一は人工受精技術の成功であり、第二は体外受精技術の成功であろう。両者の詳細とその結果も

たらされた難問については多くの紙面を要するので省くが、少なくとも産まれ方の幅がどう広がったかを追って見よう。

有史以来私たち人間の命の始まりかたは唯一、「一對の男女の性交により、その女性側が妊娠し、しかもその女性の体から子供が産まれる。一方望んでも懐妊の機会を得られなかった女性は自らの境遇を変える術をもたない」という方法だけだった。が、日本における一九四九年人工受精の成功は「一人の女性と任意の精子」から「性交」ではなく第三者の人為的操作による「注入」によって子が産まれることを可能にした。

この技術の成功が精子凍結保存技術、男女産み分け技術などを産み、代理母による出産の可能性を示した。

さらに、体外受精は一九七八年イギリスで、五年後には日本でも成功例をみた。この結果命の始まり方はより拡大し、「一人の女性と任意の精子」を「任意の精子と卵子」に「注入」を「体外での操作」に変えた。

この成功もまた、冷凍卵・冷凍受精卵の保存や解凍出

産技術、さらにギフト法といった妊娠率を上げる技術、代理母出産などを促すことになった。科学者たちは命の始まりに参画し、受精卵とその分割する姿を白日の元に晒した。

二つの技術の成功は既存の家族観、親子観、子供観、あるいは価値観を根底から揺さぶりかねない程重要な問題を内包しつつ、技術や臨床応用のみが次々と先行している現状にあるのだ。一九八五、八六年までに人工受精児が国内でおよそ六千人誕生し、体外受精児は「患者総数一八五八人中生存出産件数は四四人」といわれている。私たちは、こうした親や子どもと共存の道をすでに歩みはじめていたのである。

〈命をみつめる〉

あれこれと命の始まりを模索した。命は連続か不連続かという命題を根本に潜めながらも、国家が、医学が、宗教が、科学が多様な命の始期を立てようとす。しかも時の流れに揺れながら、それは例えば人工

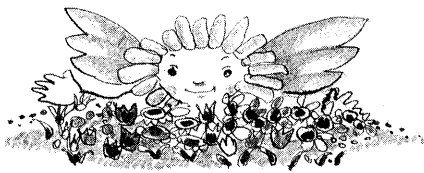
妊娠中絶の是非を巡り、あるいは出生前診断などで選択的中絶を行う可能性を考えると、また、新たな生殖技術の利用を考えると、避けて通ることができない問題だからだ。しかし単に始まりとそのバリエーションを捜すことだけに終始してはいけない。もしかすると「命は始まりなどなく連続したもので、その表出姿が変わるだけなのだ」という大いなる生命観に立つほうが私たちは穏やかに暮らせるのかもしれない。ただ、様々な始まりを追うことによって、知らず知らず時代が必要としている子どもの姿がみえかくれる。お国のお役に立つ子ども、異常のない子ども、優秀な子孫を残せる子ども、親の願い通りの時期に願いの性で産まれる子ども、パーフェクトな子ども。また、その姿は私たちの社会が抱えている問題をそのまま表出させる。例えば「コントロール」という言葉に集約される技術操作先行社会の動向を。

命の問題と対峙することは重苦しく辛い。だが、私たちは「わが子、わが身近な子供たち」への慈しみ

言語障害の臨床研究ノート(1)

私の症例報告——純粹語聾

村上 敏子



や、彼らとの日々の育ちあいを求めると同時に、ヒトの方向に向かいつつあるかもしれない小さな卵や胎児をも含めた子どもと、生殖技術を有する社会とに目をそらしてはいけない時代を生きてしまっているのだ。

あの日、にわかには饒舌になったお父さんを囲んで、ワインで乾杯をした。赤ちゃんのそばを離れなかった長女が「ねむい」と母の隣に並んで横になり、たちま

ち寝息を立て始めた。「あまったれー」とからかった長男もほどなく母の頭上のベッドで眠りはじめた。あの命の始まりに遭遇した二人はあの日どんな夢をみたのだろうか。恐らく二人はこれからも命という難問から決して目をそらすことなく成長していくにちがいない。

(お茶の水女子大学大学院)

八月十三日、水曜日。

私は、駅の階段を足早に降りると、小粋なこの都市を象徴する商店街を抜け、この地では古くから知られているホテルを目差していた。

これから十年振りにK・K君に会うのだ。

未だ春の頃、職場に電話があった。「横須賀のKです。」とおっしゃる。私のもので、十か月間ことばの勉強をしたK君のお母さんである。

K君は、お父さんの転勤に伴い鹿児島市から福岡市にやって来て、一年足らず福岡市に住み、そして、横浜市へと引っ越して行った。

K君が私のもことばの勉強をするようになった経緯を語らねばならない。

K君は、父親の当時の勤務地である鹿児島市で生まれ、当初は順調に発育し、三歳迄には、「パパには、クローン（自動車の名称）買ってやるよ。」「ママは、今日は、お泊りよ。」、また、外出した時などは、「ママ、灰が降って来るから早く帰らないと。」と鹿児島に住む

子どもらしいことを文の形で話すようになっていた。

しかし、既に二歳三か月の時に、自分で哺乳瓶を持ってミルクを飲んでる最中に後ろに倒れ、歯をくいしばり、顔面蒼白になっているのを母親が発見して以来、その後も同様のけいれん発作を起こすようになっていた。

初めての発作の七か月後に大学病院で脳波を調べた結果、「てんかん」と診断され、薬を飲み始めた。

満三歳過ぎてから、妹が誕生したが、その頃から話しかけても反応がなく、ことばを話さなくなったことに母親が気づいている。時に単語を話すことがあっても、舌がもつれた感じの発音であった。

三歳十一か月時に、ことばの相談のために訪れた児童相談所で、「妹誕生による心因性の失語症」と診断され、遊戯療法を受け始めた。母親は、K君の行動を全て受け入れるように助言された。

四歳十か月で幼稚園に入園すると直ちに、「聞こえが悪いのではないか？」と、担任から指摘された。後ろから声をかけると全く反応がないためである。大学病院の

耳鼻科で聞こえの検査を受け、「脳波を利用しての聞こえの検査結果は正常範囲で、人の声での検査の結果は、それより少し悪い。」という主旨の説明があった。セミ、こおろぎの声、飛行機の音には良く気づいた。

この間もけいれん発作は起こり、最初のうちは、調子が良い時には、不明瞭な発音ながら、単語を話すことがあったが、意味があることばを話すことは、次第になくなった。しかし、何かを話しているような抑揚のある発声とジェスチャーとをコミュニケーション手段として、体調が良い時には、幼稚園生活を楽しんだ。

そして、五歳十か月の春、父親の転勤に伴って、福岡市に引っ越して来たのである。

当時の私の職場であった通所施設に來られての相談内容は、「妹が生まれた後、ことばを話さなくなったことについて。」であった。

しかし、私は、K君と会った後、五、六年前、私が未だ大学院の学生だった時に、研究室で読んだ一冊の本を思い出していた。言語能力を測定する検査の成り立ちに

関心を持ち、読んでいた本の一つの章に、K君と良く似た状態を学習障害の二型として書いてあったのだ。「Word deafness」という見出しの章だったと思う。

私は、K君のプロフィールを把握するために、行動観察に加えて、さまざまな検査を行った。その結果、以下のことがわかった。

〈知的能力〉WPPSI知能診断検査にて、動作性知能指数75。言語性検査には応じなかった。

〈聞こえ〉聴力検査の結果は正常であった。しかし、人の声にはほとんど反応を示さなかった。

〈ことばの理解〉犬、自動車、ボール等の日常的によく用いられる語を、聞いて理解することが全くできなかった。

〈ことばの表現〉いかにも何かを話しているような抑揚を伴った「ソーソー」という発声が主であった。自発的に言ったことばは、「アンアン（犬）」のみであった。

〈文字の読み・書き〉全くできなかった。

〈行動上の問題〉注意集中の持続時間が短かった。

コミュニケーション意欲は旺盛で、主なコミュニケーション手段は、ジェスチャーと抑揚のあるジャルゴン様発声であった。

聴力損失は認められないのに、語音の認知のみが選択的に障害された状態を、「純粹語彙」と言う。文献で症例報告を調べると、けいれん発作に伴って起こることが多く、かつ、いったん獲得した言語機能が低下することから、「後天性の小児失語症」の一型とも考えられている。

私は、K君の状態は、器質的な問題に由来して起きた、この「純粹語彙」に該当すると考えたので、「心因性失語症」という以前の診断とは別に指導方針を考えることにした。指導方針を立てる上で大切なことは、現在、K君がどのような潜在的能力を持っており、それをどのように活用すれば、現在よりも効率の良いコミュニケーション方法を習得させることができるか、ということである。

K君の場合、聴覚機能は、著しく低下しているが、比較的良好的な動作性知能指数が得られたので、視覚を利用しての学習の可能性は、残されていると判断し、視覚の活用を中心としたコミュニケーション能力の改善プログラムを作成した。聴覚機能を高める指導も併せて行った。指導内容を、理解面と表出面に分けると、次の表のようになる。

〈表〉

理解	視覚	文字言語(平仮名)の理解: 有意味語
		→二語連鎖→二文節文
聴覚	読話: 単音・有意味語	音の弁別→擬音・擬声・擬態語の弁別
		→有意味語の弁別
表出	文字言語(平仮名)の表出: 有意味語→二文節文	口形模倣による音声言語の表出

六歳九か月時に、再び父親の転勤に伴って、K君が横浜市に転居するまでの十か月間の学習の成果をまとめると次のようになる。

〔音声言語の表出〕口形模倣による復唱は、六歳二月より見られるようになり、自発語は、六歳七か月より見られるようになった。面接中に観察できた自発語は、自発的な文字の音読を含めて十数語であった。

〔聴覚機能（音声言語の理解を含む）〕楽器音の弁別、環境音の弁別、擬音・擬声・擬態語の弁別は、選択肢が多くても可能であった。しかし、「ニャオ」と「メエ」、「ガオ」と「ゴー」のように、音韻的に類似したもの同士の弁別は、不可能なままであった。母音「ア」「イ」「ウ」の弁別が可能になった。聴覚的に理解できていることが確認された有意味語は、「耳」一語であった。指導の過程で、人の声や環境音に、よく反応するようになった。聴覚的な方向定位については、ひとの声をした方向や六台の電話のうち、ベルが鳴っているものを指摘することができた。

〔文字言語の理解〕急速に学習が進んだ。教えた範囲の文字（名詞、動詞、「色＋名詞」の二語連鎖、「名詞＋助詞＋動詞」の二文節文）を呈示すると、該当する物や絵カードを指示したり、該当する動作ができるようになった。

〔文字言語の表出〕教えた範囲ではあるが、絵を見て、該当する名詞、動詞、二文節文を書くようになった。伝達のために自発的に文字を書くことは、六歳六月に始まった。ある時、部屋に着くなり、「こま」と書いた。こまをまわして遊んだことを、私に伝えたかったのだ。父親が同伴して来た時には、到着するなり、「ばば」と書いた。

〔主なコミュニケーション手段〕相変わらず、ジェスチャーと抑揚を伴ったジャルゴン様発声を中心であったが、文字や絵で伝達を試みるが増した。六歳七か月に、祖父と飛行機の絵を描き、壁に貼ってある針が三時を指している紙時計を指さした。「祖父が飛行機に乗って、三時に来た。」と、私に伝えたのである。

Loebellは、「聴覚失認とは、聴力損失は認められないにもかかわらず、語音・環境音・楽器音の認知の障害および音源定位の障害があるもの」と定義している。K君も発症当初の段階では、聴覚失認状態を呈していた可能性がある。しかし、言語指導を開始した時点では、楽器音・環境音の弁別および音源定位は可能であり、語音(Speech Sound)の認知のみが選択的に障害されていることが確認された。Doennaらは、初診時にnon-Speech Soundの弁別ができなかった二例のうち、訓練後、non-Speech Soundの弁別は可能になり、Speech Soundの弁別だけが不可能な症例を、「純粹語聲」と診断し、訓練後もnon-Speech Soundの弁別が不可能な症例を「聴覚失認」と診断している。K君を「純粹語聲」と診断して指導方針を立てたことは、誤りではなかったと思う。K君も学習によって、擬音・擬声・擬態語などのSpeech Soundの聴覚的理解と弁別が確実になっていくのと平行して、聴力検査の検査音や環境音などのnon-Speech Soundへの反応も改善された。

「純粹語聲」と「聴覚失認」のように、鑑別診断の違いが、指導方針の大きな違いを生じない場合には、鑑別診断に誤りがあっても、問題は小さくて済む。しかし、「純粹語聲」と「心因性の失語症」のように、鑑別診断によって指導方針が全く異なる場合には、細心の配慮が必要となる。K君のお母さんの様子を見ると、それまでの数年間にわたる指導方針と全く異なった私の指導方針を心から受け入れてもらうには、未だ十分に時間がたっていないのだ、という思いが、私の気持ちを沈ませた。転居のあいさつに御両親一緒に来られた時言っておさった「お陰様で、Kも人間らしくなりました。」というお父さんの一言で、私の胸のつかえがとれ、私は、本当に救われた。

そして、今、私の眼の前にいるK君は、にきび華やかな高校一年生の顔に、十年前と同じく、はにかんだ笑みを浮かべている。御両親が、この十年間の出来事を愉快そうに話して下さっている中でも、K君は、「先生、あのねえ。」と切り出しては、自分のことを語る。鼎立

農業高校に通っていること、実習で野菜を作っていること、卓球が得意なことなど、ことばをゆっくりと噛みしめるように話す。時々、ろれつが回らない話し方になり、聴覚機能が未だ完全ではないことをうかがわせるし、少し複雑なことを言われると、良く聞き取れないこともあるようだ。しかし、それにしても、このように、会話を楽しめる日が来ようとは予測し難かった。

転居後は、転居先の教育委員会と県立子供医療センター言語治療科に連絡されるように伝えて、お別れしていた。あの時のK君と、今、ここにいるK君とをつなぐ数通の手紙がある。

「お元氣ですか。Kは、……ことば数も増え、最近では冗談も言うようになりました。まだ単語を並べがちなんですが、気をつけてやると、きちっとした文を話します。(十歳)」「大分ことばが増え、希望が持てるようになります。一度、是非、先生に見ていただきたいです。(十一歳)」

Louらは、脳波の異常とけいれん発作に伴って三、四

歳頃より純粋語聲や聴覚失認の状態になった四例を長期間追跡調査した結果、最終調査時には、全例が脳波が正常で、けいれん発作も起こさなくなっており、一例は、純粋語聲のままであったが、他の三例は、ほぼ正常な言語機能を回復していた、と報告している。K君も、鹿児島で起こしたけいれん発作が最後に、脳波もきれいになってきたという。K君も、予後の経過が良かった一例ということになる。予後は良好と言っても、聴覚経路からの理解と学習が著しく制限された状態の子どもが、普通学級の中で必要とされる各教科の知識を習得していくには、かなりのエネルギーを必要としたであろう。視覚経路を活用する学習の手懸りをいったん与えてやると、外へ遊びに出ることも減るほどに、学習への強い意欲を示していたので、小学校入学後は、教科学習が、即、言語再学習の過程でもあった、と推測する。

県立農業高校への進学は、本人の希望によるのではなく、成績に基づく進路指導の結果だという。しかし、入学後は、農業に関心を持ち、学校の活動に意欲的に取り

組んでいることが話からも伺えた。いかなる場に置かれても、そこでより良く生きる事ができることをK君は教えてくれている。K君には、今後も多くの人々の支持が必要であろうが、K君から喜びを与えられる人も多いに違いない。

文 献

- (1) Deonna, T. et al.: Acquired Aphasia in Childhood with Seizure Disorder: A Heterogeneous Syndrome. *Neuro-Pädiatrie*, 8(3) : 263 ~ 273, 1977.
- (2) Harskamp, F., et al.: Acquired Aphasia with Convulsive Disorders in Children : A Case Study with a Seven-Year Follow-up. *Brain and Language*, 6: 141 ~ 148, 1978.
- (3) Loebell, E.: Die akustische Agnosie. *Monatsschrift für Ohrenheilkunde und Laryngo-Rhinologie*. Wien, 107: 58 ~ 64, 1973.
- (4) Loebell, H.: Seelentaubheit. *Archiv für Ohren-Nasen*

und Kehlkopfhheilkunde, 154: 157 ~ 164, 1944.

(5) Lou, H. C., et al.: Aphasia and Epilepsy in Childhood. *Acta Neurol. Scandinav.*, 56: 46 ~ 54, 1977.

(6) Mantovani, J. F., et al.: Acquired Aphasia with Convulsive Disorder: Course and Prognosis. *Neurology*, 30: 524 ~ 529, 1980.

(7) 村上敏子 言語指導を行った純粹語聾の一症例、*音声言語医学* 23 : 125 ~ 131、一九八二。

(8) Showmaker, R. D., et al.: Pure Word Deafness (Auditory Verbal Agnosia) . Diseases of the Nervous System, 38: 293 ~ 299, 1977.

(9) 八島祐子他 : “てんかん・失語”症候群。脳と発達、14 : 37 ~ 43、一九八二。

(聖マリア病院・言語治療科)

の年の冬も、自転車通学が可能なマイルドな冬だったと
のこと。今年は八月頃から「夏のこの異常な晴天続き
と、八月中に朱い実がなっているので、今年の冬は寒
い。」と、オランダ人から聞いたことがあります。

そして、お隣のおじさんも過去二回しか経験したこと

のないという「オランダ中の運河を走るスケートレ
ス」が今年には開かれるでしょうか？早速、三人のスケ
ート靴を買い揃えたのですが……。

幼稚園を卒業したばかりの娘みづきと、夫の待つオラ

ンダ・スピポール空港に降り立っ
たのは、八か月前の四月初めでし
た。



▲ 自宅裏の運河で、到着後すぐ写す

久し振りに会う夫の手には何と
花束!! (もちろん、同僚の方達
に持たされたのは一目瞭然でした
が、やはり嬉しいものです。)そ
して、どんよりとした曇り空と、
一歩外へ出たとたん鼻をさす有
機肥料の臭い、みづきのオランダ
での第一声は

「オランダ嫌い!!」

「おいが嫌い!!」

これには、夫もショックだったようです。そのみづきが「オランダはいいところです。」と日本への手紙に書くようになるのに、一か月もかかりませんでした。

◎「ワイイ 引越した」

みづきに「引越しよ。オランダっていう国に住むことになったのよ。」と、告げたのは、夫の赴任が決まっただけです。

みづきは「ワイイ 引越した！」と大喜びです。彼女にとっては、幼い頃から一緒に遊んだ友人が、何人も引越していった経験があります。幼稚園でも、子どもの卒園を機に近郊に家を持って引越していく方、親の転勤のために引越す方など、練馬、杉並、中野の区境あたりに住む、幼稚園児を持つ位のサラリーマンの家庭にとって、引越しはめずらしい事ではありません。

娘は、今までいつも残される側にいました。引越していく人達は、不安や疲れを見せながらも、忙しそうである日突然いなくなり、家だけが今までと違う顔をして

そのまま、そこにありました。そしてある日、全く違う人達が住みはじめる、という風でした。

たまに 引越していったお友達の新しい家に招かれることがあります、行ってみると、多くの場合、新しい家だったり、大きな家だったり、おじいさん、おばあさんがニコニコ迎えてくれたり……。我が家に帰ると娘は私に言いました。「○○ちゃん、いいね。引越して。」

みづきにとって「引越し」は 何か新しい良い事が起こる、すばらしい事としてあこがれる対象になっていたようです。

私にとっても、結婚以来十三年間住んだ家は、大家さんをはじめ、近隣に良い方達に恵まれ、実り多い十三年でしたが、このあたりで、心機一転、生活を整理整頓したいと常々思いながら、中途半端でしたから、引越しは初めての体験として、何かワクワクするものがありました。

又、引越す時期は、母子共々育てていただいた日幼稚園を卒業してから、と決めました。



▲ ホールンの町で、民族衣装の女性と

娘にとっても、お友達と一緒に日幼稚園を巣立ち、オランダで、日本人学校に入学するか、インターナショナルスクールへ入る場合は、八月の新年度始まりまで、(六月までの二ヶ月と夏休みの二ヶ月)新しい土地に慣れるのにちょうど良いと考えたのです。

◎「オランダってオランダ語？」

外国に住むことも、娘にとっては、外国に住む親類、いとこ、友達と同様の体験ができること以外の何ものでもないようでした。もちろん、漠然とした不安はあるよう

でしたが、「リサと話せるようになるかな？あかねや、かおりちゃんも英語で話せるかな？」と、憧れを表すみづきでした。

オーストラリアに住む、親戚のリサが日本を訪れた時、「前、来た時はもって日本語を話していたのね。」と、お互いの国でのそれぞれの言語面での成長を、日本語の側から感じとっていました。又、オランダ行きが決まる前の夏、私の弟家族、友人家族、が住むアメリカを訪れた時、デトロイト

空港で、わからない言葉の中に放り出された程度の不安も経験し、又、十日程して、慣れて、化粧室で、手の届かない水道の蛇口を、アメリカの御婦人に回してもらい、『サンキュー』って、みづきが言ったらニコッと笑って、『何とかかんとか』って、言ってくれたよ。」と、『サンキュー』が通じた喜びも体験している娘でしたので、私も、どうにかなるさと樂觀できました。

それよりも、アメリカから帰ってから、幼稚園で「サンキュー」「エクスキューズミー」を連発する娘に、私は閉口しました。今に嫌われるよと思う反面、言葉が通じたことがよほど嬉しかったのだらうと、見て見ぬふりしかできませんでしたが――。

◎私にとっての「海外」

「海外行きが決まったよ。」と夫から告げられた時、私は行き先も聞かずに「ウン、行く。」ととびついてしまいました。

一人娘が成長するにつれて、良い仕事にも恵まれ、娘

の小学校入学を機に、もっと仕事に力を入れたいと考えていた私でした。

夏のアメリカ行きがなかったら、「せっかく良いお仕事が巡ってきたのに……」と、オランダに来るのを渋っていたかもしれせん。

アメリカの弟宅で、留学中の若いカップル達に会い、又、友人宅で、海外駐在の方々、中には単身赴任の方々の話を聞き、私なりに家族について考えさせられていました。

そして、オランダでの生活の経験は、私の人生に大いにプラスになるとも思いました。

かくして、「しばらくは、旦那様と、お子さんのために、支える側でがんばってね。」「あなたの事だから、間違ってもウツ病にはならないと思うけれど、日本の事も忘れないでね。」などと、励まし(?)や、暖かい言葉をたくさんいただいで、出発する事になりました。

八か月たって思うのは、日本にいた時よりも、夫が近くに見えるのです。共にいる時間が長いからでしょう

か。あいかわらず、オランダの人達から見れば信じられない位、長時間会社にいるし、出張も多いし、休日も仕事関係で出ていきます。でも、互いに頼りあうようになったのでしょうか？ 家族の絆は確かに強くなっています。逆に言えば、帰国した時が危ないという事なのですが――。

◎とうとうオランダ到着

とはいうものの、住む家が決まらぬまま、みづぎの学校を、日本人学校にするか、インターナショナルスクールにするかも決まらぬまま、日本人学校、又は、日本語補修校の入学式にギリギリの四月はじめに、オランダに着きました。せめて区切りとして、入学式には間にあわせてやりたかったのです。

ホテルに着くと早速、夫と、娘の学校についての話しあいです。インターナショナルスクールに魅力を感じるけれど、日本語の獲得に大切だといわれる小学校低学年、安全策として日本人学校にしようか……？ オラン



▲ マルクマールのチーズ市、日本のお友達と

ダ現地校は、オランダ語が親子とも全くだめなので、無理と判断しました。（日本人学校でも、インターでも、オランダ語の授業があります。）

いろいろと話しました。結局、無謀な選択かもしれないが、日本語に不安が出てきたら、日本人学校にいわれば良い。せっかく日本から出てきたのだから、世界にいろいろな国があることだけでも 体で感じとってくれば、幼い時期、海外で生活した意味があるのではないかと、インターナショナルスクールへの入学を決めました。

オランダに着いた翌々日、ホテルから Amsterdam Japanese Saturday School（アムステルダム日本語補修校）の入学式に出かけました。そして、補修校には、私達のような海外勤務のお子さんばかりでなく、オランダに住みついて、父、又は母親の母国語を学ぶために入学したお子さん、又、オランダの小学校に通っているお子さんもうらっしゃる事を知りました。先生方も、オランダの方と結婚して住んでいる方、留学中の方々、とさま

ざまです。校舎は、アムステルダム日本人学校を借りて毎週土曜日、九時半から三時半まで、国語、算数（社会；二年生以上）の日本語による授業をうけることになりました。

次の週は、インターナショナルスクールでの面接です。ディレクターとの面接で入学は許可され、学年を決める段になって考え込みました。インターでは五歳入学なので、娘と同年の子ども達はすでに一年生として、あと二か月を残すのみとなっています。日本で、学校生活を経験していないし、一年生では月齢が下から二番目になるというので、英語での生活に慣れるためにも、夏休みまでの二か月を Kinder garten に入れることにしました。

はじめての日、さすがに不安らしく、私の手を離しません。一時間ほど一緒にいましたが、三歳から五歳までの混合クラスのため、三歳児が、私がいるために、母親を思い出したらしく、泣き出しました。「おかあさんがいると他の子もおかあさんを思い出すから。」と言うと



▲ 遊園地エフテリングで。ごみを入れると
Pepier hier「紙くずはここへ」と話すくずかご(?)

ければならず、英語面では、年下のEちゃんに全面的に頼らなければならぬ。四歳のEちゃんが正しく娘の気持ちを通訳できるはずもなく、時として誤解されたまま、訂正することもできない等、フラストレーションはかなりのまっていたようです。顔つきも心なしかきつくなってきたなと感じていた一か月程たった時でした。夫が、ちょっとした事で娘をからかったのです。すると、びっくりするような声で泣き出し、「みづ

「わかった。」と手を離しました。二日目も、もじもじしながらも、他の日本の子ども達に囲まれて、先生の話す英語も、友達に通訳してもらっている様子。二十人のクラス中、何と日本人が五人もいるのですから。

登校をいやがりもせず、下校後も、毎日のように日本人のお友達と遊び、順調にすべり出したかにみえたインターでの毎日でしたが、この二か月は、娘にとって大変な日々だったようです。自分は日本で、幼稚園を卒業してきているのに、小さい子達のレベルで毎日を過ごさな

きはね。毎日、言葉のわからない学校に行ってるんだからね。」と訴えるのです。私の胸で三十分程泣いておさまりましたが、夫も「おとうさんも毎日、英語でみづきと一緒に泣きたいよ。」としんみりしていました。

インターに通学しはじめて 二週目に「紙ちょうだい Can I have a paper? って言うのよ。」と Native な発音で 教えてくれたり 「May I go to toilet?」「Tidy up!」とどんどん耳から英語が入ってきているなど、喜んでいた頃でした。

今、この子を支えられるのは、私と夫しかいないと実感した出来事でした。

こうして迎えた年度末の日、一人前に成績表などを頂いて帰ってきた娘に、「よくがんばったね。ごほうびにごちそうを食べに行こうか!」と声をかけずにはいられませんでした。お友達からの誘いを断って、母子二人でゆったりとすごしたかったです。出張中の主人からも電話が入り、娘はほめてもらっていました。

二か月の夏休みを、よく遊び、よく勉強してすごし、新年度、娘は一、二年生合同クラスとなりました。同年齢のお子さん達との毎日を、喜々として通学しています。

「Sundiのクラスの時にね。みづき、英語で何て言っていたかわからなかったのよ。でも今ならわかるよ。」最近、こう言うことが多くなりました。E・S・L (English Speaking Lesson) もはじまりました。Dancing, Drama, Assembly, Music, Art……等、日本とは違う教科もあります。教育方法も異なるようです。世界各国から集まった子ども達の四分の一が日本人という現実もあります。

上級生になると、日本の勉強が追いつかないと、日本語の家庭教師をつけたり、日本と同様、おけいこ事に追われ、「ジャパニーズは、父親も 母親も 子どもも忙しすぎる。」と他の国の人達に言われています。

又、日本人が、安全な地域や、スクールの沿線を選んで住むため、日本人の多い地域ができ、その地域の

地価や、物価が上がると、現地の人達に指摘されています。

緑と花がいっぱい、鳥のさえずりで目をさまし、夏はサイクリング、冬はスケートを堪能できるこの土地で、子どもを育てる事ができるのは、本当に幸せです。ゆったりとして、ニコニコと笑いかけてくれるお年寄りが幸せそうなのこの国の人々に学ぶべき事がたくさんあるように思われます。

親子三人、心豊かな毎日を送れることに感謝して、オランダの事をもっともっと知りたく思います。又、インターで世界各国の方々と話したくも思います。

「二月、雪割草が咲くと、クロッカス、水仙、ヒヤシンス、チューリップ……次から次へと花が咲くよ。Mocituin!(nice garden!)」オランダの人達は、自分で庭をつくり、自分で家を修理し、冬に備えます。私も、二百五十個の球根を娘と植えました。

こうして、この土地を好きになっていくのだなと思

ながら。

暖かい懐にうけとめてくれた穏やかなオランダの隣人たちに、好まれる家族でありたいものです。

(オランダ在住)



四月——進学・進級とともに、新しい生活のはじまりの時です。

今月は、誕生から死に至るまで、たくさんの方の（はじまり）について特集を組みました。

保育の中でも（はじまり）は、たくさんあります。園の朝、一日のはじまりの時、遊びのはじまりの時、けんかのはじまり、友だちになった時のこと、又、子どもたちが何か新しいことへ取り組むときのはじまり、どれも考えてみると、面白いことです。

それぞれのはじまりは何だったのか、どこだったのか、よく見つめることで、その子どもが見えてくるのではないのでしょうか。

今月から、村上敏子先生の「言語障害の臨床研究ノート」が、隔月の連載で、はじまります。村上先生は、九州、大牟田の聖マリア病院で言語治療をつづけていらっしやいます。臨床現場のレポーター

ト、楽しみにしております。一年間、よろしくお願いいたします。

「幼児の教育」の編集に携わって、一年がたちました。多くの先生方、先輩方にはげまされ、十二か月の号を一巡できましたこと、感謝いたしております。

保育に季節感はずかれません。しかし月刊誌の仕事は、季節感をもたせようとすると、とても大変なことなのです。なにしる、真夏にクリスマスマスのことを考え、真冬に梅雨時のことを頭にうかべなければならぬのです。半年前にすぎ去った夏の日を思い出し、来年の夏の日へとつないでいかなければなりません。しかも、そこには新しさが要求されるのです。私の固くなりかけた頭は、今、ぐるぐるまわりしています。二度目の四月号をむかえ、これで私も二年生に進級です。

読者の皆様の御意見、御感想を、お待ちしております。

(K)

幼児の教育

第八十九巻 第四号
(一九九〇年四月号)

定価四一〇円(本体三九八円)

平成二年四月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二

発売所 株式会社フレイベル館

東京都千代田区神田小川町三一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話 〇三一二九二七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレイベル館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

●フレール先生創設幼稚園150周年記念ツアー
ヨーロッパ幼児教育視察

1990年7月29日(日)～8月11日(土) 14日間

東ドイツ・チューリンゲン地方・ロンドン・フランクフルト・ハーグ・アムステルダム・パリ



歓迎してくれた
フレール第2幼稚園の子どもたち



熱心に説明を聞く先生方



フレール先生の墓の前で

昨年のツアーより

ことしは幼児教育の父、フリードリッヒ・フレール先生が世界で最初の幼稚園を創設して150年目に当たります。これを記念して、教育の原点を再確認し、また東西ヨーロッパの幼児教育の現場を視察する旅です。



フレール先生生誕の家の前で

主な訪問地

- フレール先生ゆかりの地
- 東ドイツ・チューリンゲン地方
- エルフト
- バートブランケンブルグ
- オーベルバイスバッハ

- イギリス
- ロンドン
- オランダ
- アムステルダム ●ハーグ
- フランス
- パリ



- 旅行期間 1990年7月29日(日)～8月11日(土) 14日間
- 旅行代金 815,000円 (ローンによるお支払いも可能です)
- 募集人員 25名 (定員になり次第締切らせていただきます)
- 申込締切日 1990年5月31日(木)

企画：キンダーブックの **フレール館**

旅行：日本交通公社 運輸大臣登録 一般旅行業第64号

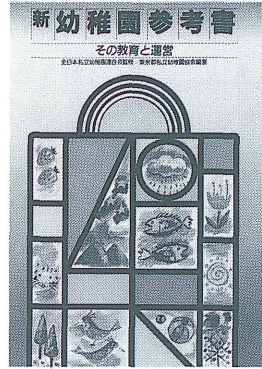
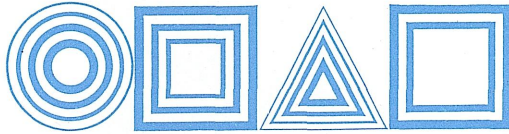
●お問い合わせ先

フレール館 ヨーロッパ幼児教育視察係
 東京都千代田区神田小川町3-1
 〒101 電話 03(292)7781(代)

JTB団体旅行新宿支店 ヨーロッパ幼児教育視察係
 (運輸大臣登録一般旅行業第64号)
 東京都新宿区西新宿1-18-8 スカイビル4階
 〒160 電話 03(346)0181(月～金09:30～17:30)

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

「幼稚園参考書」が生まれ変わりました。
 幼児の自発性を伸ばすには——
 遊びの総合性をどう組み立てるか——
 新しい教育要領をふまえた
 『新幼稚園参考書』は
 先生方の強力な助っ人です。



目次より

- 第一章 幼稚園教育の本質を考える**
- 1 幼児が育つことと幼稚園教育
 - 2 幼児を理解する
 - 3 幼児の生活とは
 - 4 教育要領改訂の視点ととらえ方
 - 5 幼児教育の内容と方法
 - 6 私立幼稚園の特性と存在の意義
- 第二章 幼児の教育を計画し実践するために**
- 1 教育課程・指導計画を考える
 - 2 指導計画作成のポイント
 - 3 指導計画の実際例とその展開
 ー長期・短期、年齢別、保育形態別
- 第三章 幼児の生活を考え充実させていくために**
- ー各園の実際例からー主体的生活・
 行事・総合性・領域・障害児
- 第四章 園やクラスをいきいきと運営するために**
- 1 園運営の基本的考え方
 - 2 クラス運営の実際
 - 3 保育の担い手としての保育者
- 第五章 幼稚園教育の歴史と展望**

B5判・上製本・436頁

定価4,000円（本体3,883円）

全日本私立幼稚園連合会監修／東京都私立幼稚園協会編著

その教育と運営

新幼稚園教育要領と実践 新幼稚園参考書

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの

フレーベル館